

1. はじめに

関西でも木枯らし1号が吹き、冬が目の前まで近づいています。先日のコシコシプログラムでは、森林植物園に行きましたが、木々が薄っすらと赤や黄色に色づきはじめた様子を見ることが出来て、秋の訪れを感じました。コロナ禍において自宅で過ごす時間が多くなると、どうしても「季節の移り変わり」を感じる事が難しくなります。皆様におかれましても、ちょっとした買い物やお出掛けの際に、「身近な秋」を探してみたいかがでしょうか。

この号の内容

1. はじめに
2. 作品紹介
3. 活動報告
4. おわりに

2. 作品紹介 ～非現実の王国で～

「非現実の王国で」とは、正式には「非現実の王国として知られる地における、ヴィヴィアン・ガールズの物語、子供奴隷の反乱に起因するグランデコ・アンジェリアン戦争の嵐の物語」といい、今現在において世界最長の小説です。作者であるヘンリー・ダーガー(1892～1973)は、この作品を自身が18歳の頃より書き始め、81歳で没する半年前まで書き続けました。ストーリーは、主人公である少女たちが、自分たちを虐げる大人たちに対して立ち向かう姿を描いたものです。今回は芸術の秋に因んで、この物語(アート作品)と作者について紹介させていただきます。



ダーガーは、自身の生涯において、この作品を他人にはほとんど披露していません。本作が世に知られるきっかけとなったのは、ダーガーが救貧院に入所している最中のことでした。大家でもある美術家のネイサン・ラーナーが、部屋にあった1万5千枚にも及ぶ原稿と、巨大な紙に描かれた300枚以上の挿絵を発見したのです。ラーナーはこれらの作品についてダーガーに尋ねましたが、本人は物語については明かさず「遺品としてすべて処分してくれ」と話していました。しかし、ラーナーは写真家としても活躍していたことから、作品の持つ芸術的な価値を感じ取り、ダーガーの死後、彼は部屋をそのままの状態に保存し、その部屋は現在、移設先の場所で博物館として原文や絵画とともに公開されています。ラーナーはのちに、次のように語っています。

「ヘンリー・ダーガーの人生の最後になってようやく、私は知ったのだ。

足を引きずって歩く、この老人が本当は何者なのか」

○ヘンリー・ダーガーの生い立ち

ヘンリー・ダーガーは1892年アメリカのシカゴで生まれました。母親は、ダーガーが4歳を迎える頃に妹の出産時に感染症により亡くなっています。また、その妹も直ぐ養子に出されてしまい、父親と2人で生活を送ることになります。父親は教育熱心で、ダーガーは学校に上がる前に読み書きを教わり1人で新聞を読むことが出来ました。しかし、その父親も彼が8歳の時に体調を崩して満足に働くことが難しくなると、ダーガーはカトリック系の児童養護施設に預けられることになりました。のちにその施設でいくつかの感情障害の兆候が見られたため、12歳の頃には知的障害児の施設へ転院させられます。

新しい施設での規則正しい暮らしが彼の性に合っていたのか、生活は概ね幸せなものでした。しかし、それも束の間、15歳の頃、最愛の父親までもが亡くなってしまいます。報せを受けたダーガーは悲しみに暮れ、何度も施設からの脱走を試み、17歳のとき脱走することに成功するのです。その後は、頼る人も住む家もない為、住み込みの清掃員としてカトリック系の病院を転々とする暮らしを始めます。「非現実の王国で」の執筆を始めるのは、そんな暮らしの最中、ダーガーが18歳の頃です。その後60年以上にも渡って書き続けられる物語は、次のような書き出しで始まります。

物語の舞台は、その題名の通り、知られざる国々の間、或は私たちの地球が彼らの月であり……
地球より数千倍も巨大な架空の惑星にある架空の世界、または国々で展開する。

○物語の内容と挿絵

ストーリーは幼い頃の父親の影響もあり、南北戦争を彷彿させるものとなっています。子供を奴隷として使役する悪しき国家「グランデリニア」と、善きキリスト教国家「アビエニア」との戦争を描いています。そのさなか、アビエニアのプリンセス「ヴィヴィアン・ガールズ」と呼ばれる7人の姉妹が、時に勇敢に、時に賢く、時に大胆に苦難を突破する内容になっています。

初めは文章のみで展開する本作ですが、その後、ダーガー自身の挿絵が加わり始めます。最初は雑誌写真の切り抜きによるコラージュを用いていました。やがて、気に入った構図やモチーフを繰り返し使うために、カーボン紙を用いたトレースを行うようになります。また、収入は豊かでなかったこともあり、画材は子供用のお絵描きセットを用いていました。



挿絵の多くは、幼い少女たちが戦いに挑む様子です。しばしば、少女たちは全裸の状態
で描かれました。しかも不思議なことに、少
女たちの股間には「未熟な男性器」が描かれ
ているのです。これには「ダーガーが女性の
身体に無知であった」という説と「勇ましさ
の象徴」「戦いに挑むもの」として描かれた
説があります。また、物語にはダーガー本人



と思わしき人物も登場しています。年が若い頃は少女達を追って戦場を駆ける従軍記者として。或は、少女達を守護する万能の超人として。また時には、強大な力を持つ敵国の将軍となり、少女達を窮地に陥れることもありました。このように、物語の展開は執筆時点でのダーガーの心境とシンクロしています。ある時ダーガーはお気に入りのモチーフであった少女の写真を紛失するのですが、そのことに酷く動揺し、写真が返ってくるように神に祈ります。ですが結局、写真は見つかりませんでした。その落胆と怒りを物語の戦況にて表現しており、非常にグロテスクな描写がなされています。

○物語の結末とその後

60年以上に渡る創作活動は、ダーガーの救貧院への入所と共に終わりを迎えます。ダーガーは、この物語に2つの結末を用意しました。ひとつは、アビエニアがグランデニアを打倒し、平和が訪れるというもの。もうひとつは、戦争は終結せず、ヴィヴィアン・ガールズは激しい戦いに身を置き続けるというもの。いずれの結末も製本されないまま放置されており、ダーガーがどちらを採用しようとしていたのかは闇の中です。ダーガーは晩年、彼の人生を振り返った手記において次のように語っています。

君は信じるだろうか。大抵の子供たちと違い、私は大人になる日を決して迎えたくなかった。
大人になりたいと思ったことは一度もない。いつも年若いままでいたかった。今や私は成人し、
年老いた脚の悪い男だ。忌々しくも。そして今や、壊れた膝のせいで、長い絵の上に、描くために
両足で立つことも難しい。それでも私は挑み、痛みがやってくると座り、また挑む。

この手記から読み解くに、物語が「完結してしまう」ことはダーガーにとって良くないことであったのかもしれない。

以上が「非現実の王国で」に関する紹介となります。本書はアウトサイダーアートの代表格として位置付けられています。日本でアウトサイダーアートと聞くと「障害者アート」と思われることが多いですが、欧米では、「西洋の芸術の伝統的な訓練を受けていない人が制作した作品であるが、アートとして扱われているもの」を指します。その為、独学で作品を作り続けた人達もこれに含まれます。ここからは作者であるヘンリー・ダーガーについての考察です。

本人亡き後である為、想像することしか出来ず個人の意見ではあるのですが、冒頭にもありますとおり、ダーガー自身はこの作品を世に出すことを拒んでいます。それは、この物語はあくまでダーガー自身が楽しむ為のものであった可能性が高いと思うからです。また、物語にダーガー自身が登場することから、彼の想像(創造性)の中にこそ彼の「生きられる場所」があったのではと思います。内容だけを見ると、グロテスクな表現や、いわゆる「ロリータ」的な描写もあることから、世間一般では敬遠されがちな表現があることも事実です。しかし、仮にダーガーにその様な性的な嗜好があったとしても、現実世界で罪を犯していない彼を責める事は出来ません。寧ろ、作品を発見したネイサン・ラーナーを始め、多くの人がこの作品に対して芸術的な視点から、高い評価をしていることも事実です。人の根源にある「○○したい」「せずにはいられない」という欲求を抱くことは誰にでもあります。しかし、それが社会では認められないことや、或は、この世では実現不可能なこと(鳥のように空を飛んでみたい、アニメのキャラクターと暮らしたい)等に対して私たちはどの様にその欲求を満たすのか、ダーガーの生き方はある意味その答えのひとつかも知れません。何と云ってもその王国は「非現実」なのですから。

3. 活動報告

10月のコシコシプログラムは「秋を楽しむ」を目的として、神戸養蜂場でのランチと森林植物園の散策を行いました。食事は、皆さんには事前に決めて頂いたピザやパスタ、ハンバーグ等のメインディッシュに加えて、パンやカレーライス、サラダ等をビュッフェスタイルで楽しみました。

コロナ対策の為、食べ物を取りに行く際はマスクと手袋の着用を求められましたが、皆さんルールを守って、好きなものを選び、召し上がることが出来ました。



養蜂場と言えばハチミツですが、ランチにもハチミツを使用したメニューが沢山ありました。写真にもありますが、クアトロフォルマッジのように直接ハチミツをかけて食べるものや、ハチミツバターをパンに塗って味わうメンバーさんもおられました。そのハチミツについてですが、マヌカハニーというものをご存知でしょうか。ニュージーランドに多く自生する野生植物のマヌカの花から摂れたハチミツのことだそうです。毎日スプーン1~2杯食べるだけで抗菌作用や免疫力アップ、胃腸の中を整える効果などがあるそうです。一般的なハチミツに比べると高価なものではありますが、興味を持たれた方は試してみたいはいかがでしょうか。



4. おわりに

本日も最後まで読んで頂き、ありがとうございました。新型コロナウイルスに関するニュースが依然として報道されていますが、これからの季節はインフルエンザ等の感染症も多くなります。過剰に恐れる必要はないのかもしれませんが、手洗いうがい等の予防は引き続きよろしくお願いたします。また、この時期は昼と夜の寒暖差が大きいので、必要な方は薄手のジャンパーをご持参ください。

発行：ライフスペース・プロペラ

654-0024 神戸市須磨区太田町2丁目1-1
土屋商店ビル

078-732-9799

2020年10月30日

(文責 山田 慎太郎)